〔論　文〕

質的研究による社会福祉研究の傾向を明らかするための予備的研究

安　田　美予子*

要約：
この研究では、社会福祉学でこれまで発表されてきた質的研究論文の特徴や傾向を明らかにする研究を計画し実施するにあたり、参考となる知見を得る目的で文献研究を行った。研究対象とした文献は質的研究論文で用いられた質的研究方法の特徴や傾向を明らかにした内外の先行研究で、国内では学問分野や研究領域を問わず、海外はソーシャルワークに限定した。本稿では、それらの文献で、研究結果として何が明らかにされていたのか、という点に焦点を当てて研究した結果を報告した。研究対象とした20の文献の中で9つが、質的研究論文における、質的研究の研究パラダイムや認識論や背景となる理論、質的研究方法論のアプローチなどの「質的研究の探求の伝統」に関心を寄せ、研究していたことが明らかになった。最後に、社会福祉学の質的研究論文の傾向や特徴を研究するにあたり、先行研究から参考にすべき点を考察した。

キーワード：社会福祉、質的研究、傾向や特徴

Ⅰ．はじめに

1. 問題の所在

社会福祉学において、研究方法としての質的研究方法は、定着し普及したといって差し支えない。なかでも、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）、ライフストーリー、エスノグラフィーなど、質的研究の個別の方法論のアプローチ[1)]を用いたソーシャルワーク実践に関連した研究、つまり、生活のしづらさや生活上の困難を抱えた個人や集団、地域社会の人びと、その支援を行う支援者に注目し、その経験や行為や何らかのプロセス、それらの意味を明らかにするような研究は多く行われるようになったと思われる。それらに加え、社会福祉学の歴史や制度や政策の研究や、それらが交叉するような研究領域で、何らかの方法で収集した質的な資料（データ）を数値や統計によらず言語を用いて質的に分析する研究も発表されている。社会保障制度審議会を構成した主要な人びとの自立の言説を議事録や行政文書をはじめとする文書資料を分析することで、1940～1950年代の自立の特徴を明らかにした研究（狩谷2020）や、歴史資料に加え「個人に体験の口述を依頼して記録・分析する歴史研究手法であるオーラルヒストリー法を参考とした聞き取り調査」（田中2021 : 15）によって、1960～1980年代のある障害児福祉関係の通園事業機関の展開過程を地方自治体の行政政策と関係づけて明らかにした研究（田中2021）がその例である。

他方で、日本で質的研究を牽引してきた研究者らの見解をもとに検討すると、質的研究の発展を阻害しかねない3つの問題があると考える。ひとつは、質的研究方法により研究され発表された論文（質的研究論文）の研究実施の手続きや方法、研究成果は信頼に足る適切なものなのか、という研究の質（quality）に関する問題である。大谷（2019 : 30-2, 40-7）は、質的研究で重要な存在論・認識論・価値論等からなるパラダイムとその類型であるポスト実証主義、社会的構成主義・解釈的パラダイム、そしてそれらも含んだ質的研究方法論が理解されず研究が行われている可能性を指摘している。また、方法論のアプローチやデータ分析法を論文著者は理解して研究を行っているのか定かでない論文があることも述べられている

＊関西学院大学人間福祉学部教授

（木下 2020 : 330）。

しかし、以上の問題は、個々の研究者や大学院生等の研究を指導する立場にある教員側に起因するのみならず、学会誌等に投稿された質的研究論文の査読にまつわる問題が関係している。これが 2 つめの問題で、質的研究論文の査読に関わる問題は木下（2020）が広く論じている。具体的には、質的研究論文の評価基準に関する査読者と投稿者間の共通認識の曖昧さや、論文字数制限の影響により、質的研究論文に記述される情報量の少なさの中で行われる査読者側の論文評価の難しさと投稿者による論文記述の簡略化といったことが示されている（木下 2020 : 326-30）。加えて、質的研究論文の査読では「査読者間で査読内容と基準が統一されていない」（福島・青木・木下・ほか 2018 : 10）という査読側の困難があることも、看護学で行われたインタビュー調査から報告されている。これらは、質的研究が発展するうえで看過できない問題である。

このような中、看護学では質的研究論文を評価する査読ガイドライン（萱間・グレッグ 2018）が開発された。ガイドラインは、質的研究論文を評価、査読するための 18 の基準、及び、各基準を判断するための具体的な説明文も添えられた充実した内容である。これらは質的研究論文を書いて投稿するにあたり理解し、論文に反映させたいものである。しかし、このガイドラインにある質的研究に関係した基準をすべて説明するような論文を書こうとすると、論文の字数制限のある中で、投稿者はやはりどこか簡略化して書かざるをえなくなるのではないのだろうか。つまり、このガイドラインの基準に沿った良質の論文を生み出そうとするならば、質的研究論文の査読のあり方自体も問われことになる。これに関連して、木下（2020 : 327-9, 331-42）が質的研究論文の、そしてこのガイドラインを用いた査読のあり方を論じている。

以上のような質的研究論文の投稿や査読にまつわる問題提起に対し、筆者も含め質的研究方法による社会福祉研究と質的研究の大学院教育を行っている者は、どのように考え対応すればよいのだろうか。

最後は、「質的研究とは何か」という、質的研究の定義や特徴に関係する問題である。質的研究はひとつの「研究領域」（Denzin & Lincoln＝2006 : 2；木下 2020 : 345）として位置づけられているものの、多種多様な質的研究の方法論のアプローチに通底し合意可能な質的研究の明確な定義を打ち出すことが難しくなっている（Flick＝2016：ii，1-3；木下 2020 : 344-8）。その背景には、質的研究は異なるパラダイムや理論の影響を受け、異なる学問分野・領域の伝統の中で特徴的なアプローチやデータ収集・分析という方法が用いられ、質的研究という包括的な領域が形成されていったことがある（Denzin & Lincoln＝2000）。さらに、国や学問や領域によって、質的研究として考えられるものや関心を寄せられるもの、使用のされ方も異なっている（Flick＝2016 : 4）。木下（2020 : 344-55）は、質的研究が定着したがゆえに、「多様性の中の共通性、統一性の明確化、つまり、研究領域としての位置づけは当初と比べてもより根本的な課題となっている」（木下 2020 : 345）という問題意識から、質的研究の定義の問題を論じている。他方で、質的研究の方法論的アプローチ共通するような質的研究の特徴が、例えば大谷（2019 : 23-9, 32-5）によって示されている。

種々のヒューマンサービスの専門領域を横断する形で「質的研究の領域化」が進んだといわれ（木下 2020 : 349）、社会福祉学の質的研究もその一翼を担ってきたとすれば、社会福祉学での質的データの収集・分析や質的研究方法の使用の広がりが予期される中、社会福祉学からみた質的研究とは何なのか、どのように定義されるのか、どのような特徴を持つのか、ということを社会福祉学の研究者が探求することも研究課題のひとつと考える。

以上をまとめると、社会福祉学における研究方法としての質的研究方法の定着と質的なデータの用いられ方の広がりの一方で、ひとつの領域として質的研究を見た場合、質的研究による研究の質、質的研究論文の査読、質的研究とは何かという問題が提起されている。このことは、社会福祉学における質的研究論文にはどのような質が求められるのか、質的研究によるより優れた研究を生むため社会福祉系大学院や社会福祉系学会は何を

するべきなのか、社会福祉学からみた質的研究とはどのようなものでどのような可能性を持つのか、ということを質的研究に携わる社会福祉研究者は議論し検討しなければならない時期にきていることを意味する。しかし、その検討や議論の前提として、社会福祉学ではどのような研究主題に対して、どのような理由から質的研究が用いられ、どのような質的研究方法論のアプローチがどう用いられてきたのかといったような、これまでの質的研究の実践の軌跡の実態を明らかにしたうえで、それを批判的に振り返る必要がある。

2. 本研究の目的

社会福祉学における質的研究の実践の軌跡を明らかにする方法のひとつとして、志村（2012）にならい、社会福祉学系学会誌でこれまで発表された質的研究論文を研究する方法がある。志村（2012）は質的研究の動向を探るために、2007年度～2011年度の間に日本社会福祉学会学会誌『社会福祉学』に掲載された論文の中から、断定的に結論づけることを保留しつつも、質的研究による論文として48本を選定し研究を行った。このように公表された質的研究論文を対象に、何らかのリサーチ・クエッションを設定し、一定の基準や手段を用いて論文を集めて分析する。それらの論文で、研究されている主題、採用された質的研究のパラダイムや個別の方法論的アプローチやその選択理由をはじめ、いくつかの視点からその特徴や傾向を分析することによって、これまで発表されてきた論文での質的研究方法の用いられ方の現状や課題を明らかにするのである。

そこで以上の研究課題や研究方法による研究を行う準備として、この研究では、国内では学問分野や研究領域を問わず、海外ではソーシャルワークにおいて、「公表された一定期間の質的研究論文を一定の方法で集め何らかの方法で分析して、論文で用いられた質的研究方法の特徴や傾向を明らかにした先行研究」の文献研究を行う。この文献研究を行うことによって、社会福祉学で発表された質的研究論文の特徴や傾向を明らかにするための着眼点、そして、その研究方法の立案や研究実施上の注意点を明らかにすることが、この研究の目的である。

次いで、この研究目的により先行研究を調べるにあたり、着目したい点がある。質的研究の存在論・認識論的前提や研究パラダイムに関する部分である。社会福祉学では、研究方法のひとつである質的研究方法に関して、研究パラダイム、存在論や認識論と結びつけられた方法論やそのアプローチやデータ収集・分析方法について、あまり検討されたり議論されたりしていないように思われる。しかし海外のソーシャルワークでも、質的研究による研究を行うにあたり、「現実に関する問題を扱う存在論」、「知識の本質についての問題を扱う認識論」、「完全で統合された研究デザインをまとめる方法論」（methodology）、「研究プロジェクトに関連する具体的な要素やステップ（例えばサンプリング、データ収集、データ分析）」に関する「方法」（method）（Staller 2012 : 403）が関連づけられ、一慣性のある研究を行うことが重視されている（Staller 2012）。したがって先行研究では、研究パラダイムや存在論・認識論に関して何がどのように調べられているのかという点にも着目する。なお、既述した質的研究のパラダイムの類型に関して、ソーシャルワークの質的研究では、Padgett（2017 : 6-8, 15）が、ポスト実証主義、構築主義（constructionism）、プラグマティズム、批判（critical）という「認識論」と表現しているがゆえ、ここでは認識論の類型とパラダイムの類型を同じものとみなす。

以上の研究目的や研究の着目点に基づき、さらに、後述のような研究方法で関連先行研究を選定し、読むことを繰り返す中で、以下のリサーチ・クエッションを設定し、研究を行った。関連する先行研究の、①研究目的は何か、②どのような研究方法（論文を集め分析する方法）が用いられたか、③研究結果として何が明らかにされているか、④③の中でとりわけ質的研究の研究パラダイムや存在論・認識論に関して何が明らかにされているか。

Ⅱ. 研究方法

この研究は文献を対象とした研究である。以上の研究目的とリサーチ・クエッションに基づき、研究対象となった国内と海外の文献を選定した方

法と整理・分析した方法を記す[2)]。

1. 文献の選定方法

文献の選定は所属大学の図書館が提供する内外のデータベース検索を中心に、また、データベース検索により選んだ論文が引用している他の文献の情報も用いて、2021 年 3 月 10 日から 10 月 30 日にかけて行った。

(1) 国内の関連文献の選定

本研究の目的とリサーチ・クエッションに基づき研究対象とした国内の論文は、最終的に、「社会福祉学や他の学問分野や研究領域において、公表された一定期間の質的研究論文を一定の方法で集め分析して、質的研究論文で用いられた質的研究方法の特徴や傾向を明らかにした論文」である。そうした論文を選ぶため、データベース CiNii Articles を用いて、「論文検索」の「フリーワード」としていくつかのキーワードを組み合わせて検索を行った。

当初は社会福祉学の論文に限定して研究する意図で、より幅広く文献をカバーできる「福祉」をキーワードのひとつとして、以下のキーワードと組み合わせて検索をはじめた。しかし、該当する文献は志村（2012）のみであることが検索過程で分かってきた。そこで他の分野・領域にも広げてこの研究を行うことにした。

CiNii の検索で用いたキーワードは、「質的研究」、「質的調査」、「定性的研究」、「動向」、「傾向」、「質的研究論文」、「質的調査論文」、「定性的研究論文」、「博士論文」である。この中のキーワードを組み合わせて、あるいは単独で使用して検索した。キーワードの中で、「博士論文」は海外のソーシャルワークの先行研究を検索する中で博士論文のみを研究対象とした文献をみつけたため、「質的調査」「定性的研究」は分野・領域によってはこの用語が用いられるため用いた。検出された文献は、タイトルと抄録、抄録が表示されない場合は、本文を読み、後述する基準も踏まえて「研究対象とする国内の論文」に合致するかどうかを判断した。また、CiNii で検出された文献を読み、本研究の研究対象として適しているかもしれないと思われた引用文献を見つけた場合、それを入手して読み、研究対象の文献としての適格さを判断した。

なお、文献の研究対象としての可否の判断に関して、その文献に、研究方法が明記されているものを選び、この基準が満たされていれば原稿の種類は問わず選定した。また、検出した論文を読む過程で、①ある学問分野や研究領域に特徴的な一部の質的研究論文が取り上げられ、その論文をもとに質的研究の動向や傾向が報告されている文献、②ある分野や領域における特定の主題や現象に関する研究の傾向や動向を調べる中で質的研究に関しても調べている文献、③混合研究法による論文や収集された質的データを量的に扱った論文も研究対象としている文献は、研究対象としないという基準を設け、最終的に文献を特定した。

(2) 海外のソーシャルワークの関連文献の選定

この研究で最終的に研究対象とした海外のソーシャルワークの文献は、「ソーシャルワークにおいて、一定の期間に公表された質的研究論文、及び、他の研究方法も含めて何らかの方法によって研究された博士論文を一定の方法で集め分析して、論文で用いられた質的研究方法やその他研究の特徴や傾向を明らかにした、英語で書かれた論文」であった。当初は質的研究論文に限定して検索していたものの、検索過程で、質的研究方法に限定することなく他の研究法によっても研究された博士論文を対象に、その研究方法やその他の特徴を明らかにした先行研究を見つけた。それらでは、質的研究に関する内容や研究主題なども調べられ、なかでも研究方法は筆者が計画している今後の研究の参考になると判断したゆえ、海外のソーシャルワークに関しては、研究対象とする文献の範囲を広げた。論文の検索には、ソーシャルワークの文献が検出される可能性が高いデータベースである“Psychology & Behavioral Sciences Collection”、“Social Sciences Full Text”、“SocINDEX with Full Text”、“ERIC”が含まれた EBSCO Host を用いた。EBSCO では検索フィールドとしてサブジェクト語を指定した詳細検索を行った。

EBSCO では、サブジェクト語として“social work”を必須に、他に“qualitative research or qualitative study or qualitative methods”、“research”、“quantitative research or quantitative study

or quantitative methods”、“epistemology”、“paradigm”、“journal articles”、“dissertation”、“trend analysis”をサブジェクト語としていくつか加えて、それぞれを and で結んで検索した。検出された論文は、タイトルとサブジェクトを読み、それだけで研究対象文献としての適格さを判断できない場合は抄録を、さらに必要な場合は本文を読んで、可否を判断した。また、データベース検索で選定した文献が引用している他の文献の情報も用いて、研究対象とする文献を選んだ。なお、ソーシャルワークの特定の現象や主題の傾向や特徴や動向を明らかにする中で質的研究に関しても調べていた文献は、研究対象としないという除外基準を設けた。

2. 選定した文献の整理と分析方法

本稿で主に焦点を当てるリサーチ・クエッションである③研究結果として何が明らかにされているか、に絞って文献を整理・分析した過程と方法を記す。

各文献の研究結果のセクションや研究結果に該当する箇所を中心に文献を読み、各文献で研究の結果として書かれていたことを類似性と差異で整理・分析した。スプレッドシートを用いて、行には特定した「方法論のアプローチ」「研究の主題」といったトピックを 1 行に 1 つ、すべての文献名を各列に書いた。トピックに対応すると判断した文献からの記述内容を抜粋あるいは要約して、英語文献の場合は翻訳して、そのトピックの行と文献の列が交叉するセルに記入した。トピックは、各文献の記述を類似性と差異で比較する中で特定し、できるだけ文献や研究一般で使用されている言葉を用いてつくっていった。文献を繰り返し読みすすめる中で、トピックの統合・分離や文献から抜粋した記述内容や要約のトピック間の移動を行い、トピックと対応する文献の記述内容を更に特定していった。文献でのトピックの記述が 1 文程度であったり図表のみでの提示であったりしたとしても、何か研究の結果として言及されていれば、明らかにされていたトピックとみなした。海外のソーシャルワークでは大きな研究の結果がいくつかに分けて報告されたと思われる文献があり、それらの文献では一部同じ内容が研究の結果としていくつかの文献で記されていたが、同じ記述内容でも個々の文献に記されていたものとみなした。文献の整理・分類やトピックの特定には、Flick（＝2017）、Creswell & Poth（2018）、大谷（2019）といった質的研究の解説書も参考にした。

文献の整理や分類やトピック名の付与にあたり、留意した点がある。研究対象とした各文献の研究が行われた背景や問題意識や目的、研究の枠組みや視点に拘束されず、各文献に共通して書かれていたことをトピックとして整理、分類した点である。質的研究による研究の質を評価する既存のチェクリスト的なものを使用して論文を評価した文献や、文献著者らが定めた研究の枠組みに沿って独自に作ったフォーマットを用いて論文を分析した文献であっても、筆者は文献著者らによる一貫した研究の志向性や分析の視点に拘束されず、研究結果として書かれている内容に注目して、その共通性や異同でトピックをつくるようにした。

Ⅲ. 研究結果

研究対象として選定した文献とその選定方法や分野・領域・国名などの基本情報を示したうえで、紙幅の都合により、本稿では既述した 4 つのリサーチ・クエッションの中でも、研究目的、研究結果として明らかにされていたこと、そして研究パラダイムや存在論・認識論に関するものをとりあげ、研究結果を記す。さらにこの中で、研究結果として明らかにされていたことに焦点をあてて述べていく。

1. 研究対象として選定した文献の概要

国内の文献として、社会福祉学の志村（2012）の他、看護学、学校保健、家族社会学から、合計 7 本を選定した。海外のソーシャルワークでは、アメリカ、カナダ、スウェーデン、台湾から合計 13 本の文献を選定した。それら論文の著者と発行年、及び、選定方法を表 1 に示した。また、海外のソーシャルワークの文献で研究対象とされていた論文を、①質的研究論文／論文（質的研究方法とそれ以外の研究方法よっても研究された論文）、②雑誌掲載論文／博士論文に分けて、その

表 1　本研究の研究対象として特定した文献とその選定方法

国内・海外	選定方法	データベース検索で用いたキーワード	特定した文献	
			著者と発行年	分野・研究領域、または国
国内の研究	データベース CiNii Article による検索	質的研究、動向	関島・香月・高木・ほか（2005） 木戸（2011） 志村（2012）	看護学 家族社会学 社会福祉学
		質的研究論文	中村・石崎・伊豆・ほか（2009） 戈木・水戸・関（2012 abc）	学校保健 看護学
海外の研究（ソーシャルワーク）	データベース EBSCO Host による検索[1]	social work, qualitative research or qualitative study or qualitative methods, epistemology	Gringeri, Barusch & Cambron（2013 ab） Braganza, Akesson & Rothwell（2017）	アメリカ カナダ
		social work, qualitative research or qualitative study or qualitative methods, journal articles	Barusch, Gringeri & Molly（2011）	アメリカ
		social work, qualitative research or qualitative study or qualitative methods, dissertation	Shek, Lee & Tam（2007） Akesson, Braganza & Root（2018）	台湾 カナダ
		social work, research, dissertation	Dellgran & Höjer（2003 a, 2012） Maynard, Vaughn & Sarteschi（2014） Rothwell, Lach & Blumenthal et al.（2015）	スウェーデン アメリカ カナダ
	EBSCO Host から検出した文献の引用文献の情報による選定		Brun（1997） Dellgran & Höjer（2001, 2003 b）	アメリカ スウェーデン

注）
1. 表に記載した文献は、他のキーワードの組み合わせによっても検出されている。

表 2　海外のソーシャルワークの文献で研究対象とされていた論文の内訳

	質的研究論文	論文（質的研究法とそれ以外の研究方法よっても研究された論文）
雑誌掲載論文	Barusch, Gringeri & Molly（2011） Gringeri, Barusch & Cambron（2013 a）	
博士論文	Brun（1997） Gringeri, Barusch & Cambron（2013 b） Braganza, Akesson & Rothwell（2017） Akesson, Braganza & Root（2018）	Dellgran & Höjer（2001, 2003 ab, 2012） Shek, Lee & Tam（2007） Maynard, Vaughn & Sarteschi（2014） Rothwell, Lach & Blumenthal et al.（2015）

表 3　研究対象とした各文献の研究目的、及び、各文献で研究対象となっていた論文の概要

分野領域国	文献の著者と発表年	研究目的（1）と研究対象となった論文（2）
社会福祉学	志村（2012）	（1）日本の社会福祉研究における質的研究の動向を数値的に把握することである。（2）日本社会福祉学会学会誌『社会福祉学』に掲載された質的なデータを質的に分析した 2007 年度～2011 年度の 48 本の論文である。

看護学	関島・香月・高木・ほか(2005)	(1) 看護の質的研究論文で用いられているデータ解釈法を明らかにし、看護での質的研究発展のための課題を検討することである。(2) 医学中央雑誌に登録されている 1994 年 4 月～2004 年 3 月に発表された看護の論文の中から選定された 297 本の質的研究論文である。
	戈木・水戸・関(2012 a)[1]	(1) 医療系雑誌で発表されてきた論文の質的研究方法のアプローチ毎の推移と GTA が他のアプローチと区別して用いられているか明らかにする目的で行われた。(2) 医学中央雑誌 Web に掲載された 1990～2010 年の論文の中から抽出された 2241 本の質的研究論文である。次に、その中から GTA の統制語で検出された 432 本が研究対象となった。
	戈木・水戸・関(2012 b)	(1) GTA による質的研究論文に限定して、GTA という方法論のアプローチの選択とデータ収集について、検討することである。(2) 戈木・水戸・関（2012 a）で GTA の統制語で抽出された 432 本の中から選定・特定された GTA によって研究された 160 本の論文である。
	戈木・水戸・関(2012 c)	(1) GTA による論文における GTA のデータ分析に関して、その説明と推測される用いられ方、さらに、それら論文での新たな知見の記載のされ方について、検討することである。(2) 戈木・水戸・関（2012 b）と同じ 160 本の GTA による論文である。
学校保健	中村・石崎・伊豆・ほか(2009)	(1) 学校保健関連の質的研究論文について、研究の質の視点から論文の記述に関する問題点を明らかにし、研究の質を高めるための質的研究のあり方を考察することである。(2) 学校保健の主要な学会誌三誌に 2003～2007 年度に掲載された論文の中から選定された 21 本の質的研究論文である。
家族社会学	木戸（2011）	(1) 過去 20 年間の家族社会学における質的研究について、質的研究論文の数、データと収集法、方法論的特徴、主題の点から検討し、家族社会学における質的研究の意義と課題を議論することである。(2) 日本家族社会学会誌『家族社会学研究』に 1989～2010 年の間に掲載され、質的研究論文として選定された 45 本である。
アメリカ	Brun（1997）	(1) 質的研究方法によって研究されたソーシャルワークの博士論文における質的研究方法の過程を理解することである。(2) 博士論文関係の CD-ROM を用いて選定された 1986～1993 年の間に発表された質的研究方法による 54 本のソーシャルワークの博士論文である。
	Barusch, Gringeri & Molly（2011）	(1) 質的研究方法によって研究されたソーシャルワークの論文で、研究の厳密性を高めるために使われた戦略を明らかにすることである。(2) ソーシャルワークの雑誌 27 誌の中から無作為に抽出された 2003～2008 年に発表された質的研究論文 100 本である。
	Gringeri, Barusch & Cambron（2013 a）	(1) 質的方法によるソーシャルワークの論文の認識論的基盤（反射性、研究者と研究参加者の関係、理論、研究パラダイムあるいは探求の伝統）を明らかにすることである。(2) ソーシャルワークの雑誌 27 誌の中から無作為に抽出された 2008～2010 年に発表の質的研究論文 100 本である。
	Gringeri, Barusch & Cambron（2013 b）	(1) 質的方法によるアメリカのソーシャルワークの博士論文を研究し、博士課程の大学院生が質的研究の認識論的基盤と研究の厳密性に関して学んでいることを評価することである。(2) 博士論文のデータベースに掲載された 2008～2010 年に完成の博士論文の中から無作為に抽出された質的研究方法によるアメリカのソーシャルワークの博士論文 75 本である。
	Maynard, Vaughn & Sarteschi（2014）	(1) アメリカのソーシャルワークの博士論文の研究を通じ、ソーシャルワーク・リサーチ[2]の現状や傾向を明らかにし、若手研究者のリサーチのトレーニングやリサーチ力、専門的な知識や技術、関心について検討することである。(2) 博士論文のデータベースで 1998～2008 年の間に発表されたソーシャルワークの博士論文の中から無作為に抽出された 593 本である。
カナダ	Rothwell, Lach & Blumenthal et al.（2015）	(1) カナダのソーシャルワークの博士論文の概要（数、研究方法、トピックほか）とソーシャルワークの知識産出の時系列的な傾向を明らかにすることである。(2) 博士論文のデータベースの検索と他の方法を組み合わせて選定された、2001～2011 年の間に発表されたカナダのソーシャルワークの 248 本の博士論文である。
	Braganza, Akesson & Rothwell（2017）	(1) GTA によって研究されたカナダのソーシャルワークの博士論文を質的研究の質の観点から評価し、質的研究によるソーシャルワーク・リサーチの質に関して議論することである。(2) 2001～2011 年の間に発表されたカナダのソーシャルワークの博士論文の中から選定された、GTA を方法論として用いた 39 本の博士論文である。
	Akesson, Braganza & Root（2018）	(1) GTA によって研究されたカナダのソーシャルワークの博士論文を理論構築の視点から評価し、GTA による理論構築の現状を検討することである。(2) 研究対象は Braganza, Akesson & Rothwell（2017）と同じ GTA による博士論文である。

スウェーデン	Dellgran & Höjer（2001）	（1）この論文はスウェーデンのソーシャルワークにおける学術的知識の発展を研究した研究プロジェクトの一部であり、博士論文の研究をはじめ幾つかの研究に基づきスウェーデンのソーシャルワークの研究方法の現状を述べ、その背景を考察することが目的である。（2）1980～1998 年の間に完成したスウェーデンのソーシャルワークの 89 本の博士論文である。
	Dellgran & Höjer（2003 a）	（1）この論文は、リサーチが生み出す知識とその教育・実践での利用や影響を研究するために行われた幾つかの研究をもとにしている。博士論文の研究は、トピック、研究方法、理論の使用を説明し、その背景の要因やソーシャルワークの発展のための課題を検討する目的で行われた。（2）1980～1998 年までに完成したスウェーデンのソーシャルワークの 89 本の博士論文である。
	Dellgran & Höjer（2003 b）[3]	（1）この論文は、他分野の知識の導入と独自の知識の開発というソーシャルワークの知識の矛盾や緊張を検討するために行われた幾つかの研究をもとにしている。博士論文の研究は、論文で用いられた理論に関して記述・分析することを目的で行われた。（2）1980～1998 年の間に完成したスウェーデンのソーシャルワークの 89 本の博士論文である。
	Dellgran & Höjer（2012）	（1）スウェーデンのソーシャルワークの博士論文の形態（言語と様式）、研究主題、研究方法、理論について明らかにし、それらが意味することをソーシャルワークのアカデミック化の過程で生じる緊張と関連づけて議論することである。（2）1980～2009 年の間にスウェーデンで発表された 253 本のソーシャルワークの博士論文である。
台湾	Shek, Lee & Tam（2007）	（1）台湾のソーシャルワークの博士論文と修士論文を研究することで台湾のソーシャルワーク・リサーチの現状を明らかにし、ソーシャルワーク教育をより理解することである。（2）台湾のソーシャルワークの博士論文と学位論文のデータベースから抽出された 1999～2006 年の第 1 四半期までに完成したソーシャルワークの博士論文 31 本である。

注）
1. 戈木・水戸・関（2012 abc）は、質的研究方法は医療分野の研究で適切に用いられているのか、医療系雑誌における質的研究の定着状況について検討することが大きな研究目的である（戈木・水戸・関 2012 a）。また、これらの文献における GTA とはグレーザーとストラウスによる 1967 年のオリジナル版のことで、手順や技法はストラウス版から派生した 1998 年発刊のストラウスとコービン版、2008 年発刊のコービンとストラウス版、この論文の第一著者の戈木による一連の戈木クレイグヒル版を用いたものであり、M-GTA は GTA の中に含まれていない（戈木・水戸・関 2012 ab）。
2. 海外のソーシャルワークの文献で用いられていた social work research や research method をはじめとする research の訳は、文脈に応じて、「リサーチ」あるいは「研究」で使い分けている。なお、本文でも同様に海外のソーシャルワークの research について言及する場合、リサーチと研究という言葉を使い分けている。
3. この文献は、博士論文における質的研究に関して、研究結果として何か示されているわけではないが、Dellgran & Höjer（2001, 2003 a）と同じ博士論文が研究対象となったと考えられたため研究対象の文献として取り上げた。研究方法は博士論文の研究に関係したことのみを記した。

内訳を表 2 に示した。さらに、国内及び海外の各文献の研究目的と研究対象となっていた論文の概要を表 3 に記した[3)]。内外の文献の中で、戈木・水戸・関（2012 abc）、Braganza, Akesson & Rothwell（2017）と Akesson, Braganza & Root（2018）は、質的研究の方法論のアプローチの中でもグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用いた研究を報告した論文や博士論文をとりあげて研究していた。

国内文献において、研究対象とされていた論文は、特定の学会誌から選ばれたもの（中村・石崎・伊豆・ほか 2009；木戸 2011；志村 2012）、または、医療や看護という大きな分野から抽出されたもの（関島・香月・高木・ほか 2005；戈木・水戸・関 2012 abc）の 2 つに分けられた（表 3）。海外のソーシャルワークの文献では、表 2 にあるように、国を問わず、博士論文を対象に研究が行われていたものが複数あったことが特徴的である。

2. 研究結果として明らかにされていたこと

各文献の研究の結果として明らかにされていたことは多岐にわたった。筆者が特定したトピックの中で、そのトピックに該当する記述があると判断した文献数が 7 以上のトピックを取り上げ、トピック名、該当文献数と文献名を表 4 に示した。

トピックの中で、「研究方法」を明らかにしていたソーシャルワークの文献は、質的研究方法とそれ以外の研究方法によっても研究されていた博士論文を研究対象とした文献だった。「研究の主題」も同様に、その研究方法を問わずに博士論文を対象に研究した文献で扱われており、ソーシャルワークのどのような主題やトピックで博士論文の研究が行われているのか、ということが示されていた。「理論」は、質的研究方法による論文（雑誌）と博士論文を対象に研究した文献、そし

表 4　文献で研究結果として明らかにされていたトピック、及び、文献数と文献名

トピック[1]	文献数	文献名
質的研究の探求の伝統	9	Dellgran & Höjer（2001）、Barusch, Gringeri & Molly（2011）、Gringeri, Barusch & Cambron （2013 ab）、Rothwell, Lach & Blumenthal et al. （2015）、Braganza, Akesson & Rothwell（2017）、Akesson, Braganza & Root（2018）、木戸（2011）、才木・水戸・関（2012 a）
研究方法[2]	7	Dellgran & Höjer（2001, 2003 a, 2012）、Shek, Lee & Tam（2007）、Maynard, Vaughn & Sarteschi（2014）、Rothwell, Lach & Blumenthal et al. （2015）、中村・石崎・伊豆・ほか（2009）
研究の主題	7	Dellgran & Höjer（2001, 2003 a, 2012）、Shek, Lee & Tam（2007）、Maynard, Vaughn & Sarteschi（2014）、Rothwell, Lach & Blumenthal et al. （2015）、木戸（2011）
理論[3]	7	Brun（1997）、Dellgran & Höjer（2003 ab, 2012）、Barusch, Gringeri & Molly（2011）、Gringeri, Barusch & Cambron（2013 ab）

注）
1. トピックの中には、何かの経年変化が調べられているものもあったが、「経年変化」自体はトピックとして作成していない。
2. 研究方法とは、論文で用いられていた研究方法のことで、「質的研究法」「量的研究法」「混合研究法」「決定できない」「非経験的研究」などに分類され、研究方法毎の論文数や割合が示されていた。
3. ここでの理論とは「質的研究の探求の伝統」に含まれるような質的研究方法の基盤となるような理論ではなく、その論文の理論的枠組みに該当するような理論や概念のことを主に指している。ただし、理論に分類した文献の中には、Dellgran & Höjer（2012 : 592）のように、各論文における「支配的な理論的志向」「理論的方向性」に相当するような概念・理論を特定して例示し、例示の中に質的研究法のパラダイムや方法論的アプローチやその基盤理論に相当する社会構成主義、ディスコース分析、シンボリック相互作用論を含ませていたものもある。しかし、Dellgran & Höjer（2012）が例示した理論・概念の多くは、質的研究法に関係した理論・概念というよりも、研究の理論的枠組みに該当するような理論・概念と判断したため、理論というトピックに分類した。

て、その研究方法を問わず博士論文を対象に研究した文献で、明らかにされていた。

表 4 には含めていないトピックであるが、文献の中には、質的研究に特徴的な研究者と研究者参加者との関係や相互作用（Brun 1997 ; Gringeri, Barusch & Cambron 2013 ab）や反射性（reflexivity）（Barusch, Gringeri & Molly 2011 ; Gringeri, Barusch & Cambron 2013 ab）を明らかにしたものがあり、いずれも質的研究論文のみを対象に研究した文献であった。また、研究対象とされたソーシャルワークの博士論文で論文著者が質的研究方法を用いた理由や動機を明らかにした文献もあり、「参加者の生きられた経験の一層の理解」「現状の知識は研究対象の現象を説明しない」（Brun 1997 : 101）、「それを生き、その意味を生み出した人々の視点から、生きられた経験を捉えたい」（Dellgran & Höjer 2001 : 245）、「クライエントや実践者の様々なグループから経験や意味を把握したい」（Dellgran & Höjer 2003 a：568）ということが報告されていた。こうした内容をリサーチ・クエッションとして社会福祉学の質的研究論文を研究することは、社会福祉学における質的研究の傾向や特徴、さらに課題を明らかにするために有効であると思われる。

次に、表 4 に示したように、研究結果として明らかにしていた文献数がもっとも多く、かつ、この研究の主なリサーチ・クエッションのひとつであった質的研究の存在論・認識論やパラダイムに関係した「質的研究の探求の伝統」に焦点を当て記していく。

「質的研究の探求の伝統」に関する内容を含むと判断した文献は、ソーシャルワークの質的研究論文のみを研究対象としたアメリカの Barusch, Gringeri & Molly（2011）、Gringeri, Barusch & Cambron（2013 ab）、GTA による博士論文を研究したカナダの Braganza, Akesson & Rothwell（2017）と Akesson, Braganza & Root（2018）、その研究方法を問わず博士論文を研究対象としたスウェーデンの Dellgran & Höjer（2001）とカナダの Rothwell, Lach & Blumenthal et al.（2015）、家族社会学の木戸（2011）、看護学の才木・水戸・関（2012 a）である[4)]。質的研究の「探求の伝統」（tradition of inquiry）という言葉は、Gringeri, Barusch & Cambron（2013 a : 58）で「特定のパラダイムあるいは探究の伝統」というように使われていたものである。研究対象とした博士論文の質的研究の方法論のアプローチや背景にあった理論を併せて報告する中で Dellgran & Höjer（2001 : 245）も「伝統」という言葉を用いていたため、この言葉で包括的に表すこととした。つまり、質的研究の「探求の伝統」には、研究パラダイムや認識論の類型、個別のアプローチの他、大谷

（2019 : 29）が質的研究の「思想的系譜」と呼びパラダイムにつながるようなものと示している理論や哲学も含まれている。次に 9 つの文献の中で、具体的な質的研究の研究パラダイムや方法論アプローチの名称や割合・数を明らかにしていた文献を取り上げて紹介する。

質的研究の探求の伝統に関して、研究が行われた国や学問分野によって、異なる言葉を使って種々の伝統が報告された。海外のソーシャルワークでは、Gringeri, Barusch & Cambron（2013 a）は、研究対象とした 100 の質的研究論文のなかで 49% の論文が研究パラダイムを使用したと記し、さらに、20 人の著者がグラウンデッド・セオリー（GT）を、8 人が参加型アクションリサーチ、6 人が現象学を使っていたと報告していた。同じ著者らが質的研究による博士論文のみを研究した Gringeri, Barusch & Cambron（2013 b）は、13% の博士論文がパラダイムを記し、その内訳として構成主義が 8%、参加型アクションリサーチは 4%、フェミニスト批判理論などその他のパラダイムが 7%、ポスト実証主義はなしと、パラダイムの種類毎に論文の割合を報告していた。用いられた方法論のアプローチの割合も示され、博士論文の 43% が GT を、20% が現象学を、13% がエスノグラフィー、同じく 13% が事例研究、4 %がナラティヴ、7% がその他のものを用いていた。GTA による博士論文のみを研究対象としたカナダの Akesson, Braganza & Root（2018 : 215）は、論文著者の「認識論レンズ」が GT で強調された理論の産出に影響する可能性があると考え、博士論文の GT の認識論を調べた。それによると、構成主義的な認識論の著者は 16 人、実証主義あるいはポスト実証主義が 6 人、フェミニストあるいはフェミニスト的な認識論的アプローチが 2 人、自然主義的パラダイムが 1 名、どの認識論か定かでなかったのが 14 人であった。

その研究方法を問わず博士論文を研究した Dellgran & Höjer（2001 : 245）は、質的方法には「部分的に異質な認識論的つながりを持つ、いくつかの個々に独立した伝統が含まれている」と述べ、質的研究による博士論文にみられた探求の伝統に関心を払った。博士論文では、エスノグラフィカルな研究、人類学的研究、ナラティヴ、GT、アクションに関係したリサーチといった幅広い伝統が言及され、他に、ディスカーシブ分析（discursive analysis）、現象学、エスノメソドロジー、さらに、質的研究の思想的系譜の例（大谷 2019 : 29）としてあげられたシンボリック相互作用論、解釈学によるものがあったことが報告された。次いで Rothwell, Lach & Blumenthal et al.（2015）では、研究対象とした博士論文の中で質的方法によるものが 65.3%、混合研究法によるものが 17.7% であり、両方法による論文（206 本）で著者が用いたと記していたアプローチの内訳が示された。それによると、質的記述（qualitative description）が 26%、GT が 22%、現象学 12%、事例研究が 10%、エスノグラフィーが 5%、ナラティヴが 2 %、23% は分類されなかった。

木戸（2011）は、研究対象とした質的研究論文で使われた「方法論」（木戸 2011 : 153）に関して、データの種類という視点から特徴的なものを整理した。その中で、調査協力者の語りをもとに研究者が事実を再構成するライフヒストリー的な研究、それに対し対話的構築主義的なライフストーリーやナラティヴなど「語りがもつ社会的な力や、そうした語りを産出する対象者の主体性に着目」したもの、文書を用いた「言説分析あるいは社会構築主義的な立場からの研究」（木戸 2011 : 154）、GT による論文などの傾向が示され、最後に全体的な特徴と課題が総括されていた。才木・水戸・関（2012 a : 482）は、医療系の質的研究論文の「質的研究法」の種類毎による論文数の発表年ごとの推移を示した。研究法として KJ 法、GTA、内容分析、ナラティヴ、ライフヒストリー・ライフストーリー、現象学、アクションリサーチ、フィールドワーク、エスノグラフィー、エスノメソドロジーと会話分析、談話分析・ディスコース分析があげられ、アプローチ毎の論文数と割合が示された。上位 5 位は、KJ 法で 27.6%、GTA で 19.3%、内容分析で 17.4%、ナラティヴで 15.0%、ライフストーリー・ライフヒストリーが 10% だった。さらに著者らは、GTA で検索された論文を精査し、M-GTA により研究された論文であるにもかかわらず GTA を用いたと記した論文が 34 本あり、論文著者がアプローチの違いを認識していない可能性を指摘し

た。著者らは「研究法は単なる技法の寄せ集めではなく、物の見方、データ収集方法、データ分析方法の総体として、固有の名前が付けられている」（才木・水戸・関 2012 a : 487）と述べ、質的研究の方法論のアプローチとして GTA を理解することを重視していることがうかがえた。

以上をまとめると、海外のソーシャルワークでは、質的研究の方法論的アプローチとして、GT、現象学、ナラティヴ、エスノグラフィーが国を問わず用いられていることが示された。これを国内文献の研究結果と照らし合わせると、GTA とナラティヴというアプローチが内外で用いられることも明らかになった。

Ⅳ．考察

ここでは、質的研究の探求の伝統、及び、海外のソーシャルワークの文献で多かった博士論文を対象とした研究をとりあげ、社会福祉学で発表されてきた質的研究論文の傾向や特徴を解明するための研究の計画と実施で参考にする点を中心に考察する。

1. 質的研究の探求の伝統に関して

（1）何を研究するのか

海外のソーシャルワークでは、研究対象とした質的研究論文で記されていた質的研究のパラダイムや認識論の種類、方法論のアプローチを一定の方法で抽出し、その種類や論文本数、割合を示していた。このように論文で用いられたと記された質的研究の研究パラダイムや認識論や理論、方法論のアプローチの具体的な名称をあげて数値で実態を補足することによって、社会福祉学で用いられてきた質的研究の傾向をわかりやすく把握できる。一方で、GTA による論文を対象に研究した文献では（才木・水戸・関 2012 abc ; Braganza, Akesson & Rothwell 2017 ; Akesson, Braganza & Root 2018）、GTA の特性に基づく研究が行われたのか、研究方法等の説明や記述の仕方はこのアプローチの特性を踏まえているのか、といった論文や研究の質を評価する視点から研究が行われていた。これらの研究は非常に意義深いものの、そうした視点から質的研究論文の傾向や特徴を明らかにする場合は、研究者が精通している特定の方法論のアプローチに絞って研究するのでなければ実施が難しい。したがって、質的研究の研究パラダイムや認識論や理論的背景や方法論的アプローチについて、社会福祉学の質的研究論文で何が明示されているのか、という実態を把握することを第一歩として、そこを起点に、質的研究の探求の伝統に関して、社会福祉学における質的研究の今後の発展に向けての課題を広く考察することが現実的なステップであり、そうした研究であっても意義があると考える。

（2）どのように研究するのか

次に、質的研究論文にみられる質的研究の探求の伝統を明らかにするための研究方法に関係した留意点があることが考察された。研究者が研究対象の質的研究論文を読む際の読み方や読んだものを解釈する基準に関係する部分である。具体的には、論文著者が研究方法について書いていること、例えば使ったと書いている方法論的アプローチ名を単に抽出するのか、あるいは、使ったと書いている方法論的アプローチがどのように使われているのかといったことを考えながら読むのかという点である。

例えば、研究対象とした 100 本の質的研究論文の中で 20 本が GT を用いていたと報告した Gringeri, Barusch & Cambron（2013 a : 60）は、GT は、「経験に基づくモデルあるいは理論を生み出すための包括的なパラダイムとしてではなく、データ分析の戦略として使用」されていたと説明を付記していた。この著者らは、方法論のアプローチが本来の目的や形で用いられているのか、それを構成する基礎的で重要なことが適切に用いられているかという視点からではなく、それが論文に書かれているか／書かれていないか、書かれているならば何が書かれているか、という点から研究していた。しかし、この報告がなされたことは、論文を読んで精査する中で、著者らがこの点に気づいたがゆえに、上述の記述がなされたということであろう。例えば質的研究論文でどのような質的研究の方法論的アプローチが用いられたかというリサーチ・クエッションで研究を行ったとしても、研究者が精通しているアプローチを使ったと書かれた論文を読むと、それは研究の導

入や方法のセクションでどのように説明され、どのような研究結果が示されているのか、アプローチはデータ収集・分析のための方法レベルで用いられているのか、それとも方法論のアプローチとして用いられているのか、という読み方となる可能性がある。

ゆえに、質的研究の探求の伝統に関して質的研究論文で何が用いられたかというリサーチ・クエッションで研究を行う場合、研究者が論文をどのように読むのか、という基準を明確にする必要がある。その点に関して、Rothwell, Lach & Blumenthal et al.（2015）は、できるだけ博士論文の記述に忠実にコード化し、例えば Rothwell らがある質的研究の方法論的なアプローチの特性や基本とみなしているものをその論文が満たしているかどうかを判断するという、評価的な基準は用いなかったと、コーディング手続きの基準を明確にしていた。方法論のアプローチを例にすると、Rothwell, Lach & Blumenthal et al.（2015）のように、論文著者らがどのようなアプローチを用いたと記していても、アプローチ間で差がでないよう、そして、種々のアプローチに対する研究者の理解や精通の度合いの違いで差が出ないように、論文を読み分析する際の統一的な基準を設けることが必要になる。あるいは、もし方法論のアプローチ間で論文を読み解釈する基準に差をつけるならば、基準が明確になるよう、研究方法の計画時に基準を検討し、研究対象論文をレビューする折にも意識する必要がある。また、使ったと書かれている方法論のアプローチが本来とは異なる用いられ方をしていたと判断されるような論文が見つかった場合、その論文をどう位置づけ整理・分類をするのか、研究結果としてどう報告するのか、ということも判断しなければならない。こうした点含めて、リサーチ・クエッションや研究方法を検討する必要ある。

2. 博士論文を研究する意義

海外のソーシャルワークの文献では博士論文のみを対象に研究した文献が複数あった。その研究の背景となった問題意識や研究目的は様々であるものの、ソーシャルワーク・リサーチの傾向・現状や方法論の傾向（Shek, Lee & Tam 2007 ; Braganza, Akesson & Rothwell 2017 ; Akesson, Braganza & Root 2018）、ソーシャルワークの博士課程の教育（Gringeri, Barusch & Cambron 2013 b ; Rothwell, Lach & Blumenthal et al. 2015 ; Akesson, Braganza & Root 2018）、ソーシャルワークの教員や指導・審査に関わる教員の専門性や重視する点や関心（Gringeri, Barusch & Cambron 2013 b ; Maynard, Vaughn & Sarteschi 2014）、若手研究者や大学院生のリサーチに関する能力や知識やスキル（Gringeri, Barusch & Cambron 2013 b ; Maynard, Vaughn & Sarteschi 2014）、大学院生をその学問の伝統に誘う「社会化の道具」や「パラダイムの反射鏡」（Dellgran & Höjer 2001 : 245）など、様々な側面を表すものとみなされ、各国で研究されていた。

これらの先行研究が表すように、博士論文は、執筆者の研究する力のみならず、大学院教育や指導・審査する立場の教員、ある分野・領域の研究のこれまでの軌跡や現状といったものの反映といえる。また、研究過程が詳述され質的研究の論点も議論されている可能性から、Brun（1997）が博士論文を研究対象にしたように、博士論文では十分述べる余裕のない著者の存在論・認識論的前提、研究者と研究参加者・調査協力者との相互作用、研究者の反射性なども説明することができる。博士論文を対象に質的研究の傾向の研究を行うことは、社会福祉学の研究全般や大学院教育、社会福祉系学会などに対し示唆することが大きいと思われる。

しかし、博士論文を研究するためには、「質的研究方法により研究された社会福祉学の博士論文」を選定し入手する方法を検討する必要がある。入手に関しては、データベース CiNii Dissertation を通じて、電子化されたものを得ることができる。2013 年 4 月 1 日に施行された「学位規則の一部を改正する省令」により、博士論文またはその要約がインターネットで公表されるようになったため（文部科学省 2013）、これ以降のものは全文か要約を得ることが可能である。問題となるのは、博士論文の中で、①その博士論文が質的研究方法を用いており、②社会福祉学に立脚するという点を、どう判断するのかという点である。②については、基準のひとつとして、一般社団法

人日本ソーシャルワーク教育学校連盟の会員校で大学院後期課程を持つ機関から授与された博士論文、というものが考えられる。「質的研究方法により研究された社会福祉学の博士論文」の選定基準やデータベースを使った収集方法を、検討する必要がある。

Ⅴ．今後の研究課題

この研究では、社会福祉学で発表されてきた質的研究論文の特徴や傾向を明らかにする研究を計画・実施するための準備として、質的研究論文で用いられた質的研究方法の特徴や傾向を明らかにした内外の先行研究の文献研究を行った。本稿では、それらの文献において、研究結果として何が明らかにされていたのか、その中でも「質的研究の探求の伝統」というトピックに分類された結果について述べ、この点と博士論文を研究するにあたっての研究方法の課題を考察した。

今後の研究課題は 2 つある。ひとつはこの研究の限界でもあるが、質的研究を行ううえで検討し踏まえなければならない過程や基盤となるような枠組みを検討することである。本稿でその見解を紹介した Staller（2012）も述べているように、質的研究の解説書や論者によって、存在論－認識論－方法論－方法という質的研究の過程や基盤的な枠組みに含まれる要素やその分け方、存在論や認識論や方法論や研究パラダイムの定義、それらの説明の仕方、類型の仕方も異なっている。この研究では、筆者が前提とする質的研究の過程や基盤的な枠組みについて、十分検討した上で議論することができていない。質的研究論文の傾向や動向を調べる上で重要となるこの点について、今後検討していかなければならない。

もうひとつは、一定期間に公表された社会福祉学の質的研究論文を研究するための研究方法の検討である。今回の文献研究を通じて、考察部分で示した内容の他にも研究方法の検討課題が多々あることが発見された。文献の中には、厳密な手続きで対象論文の選定と論文分析が行われ、そうした手続きや方法や諸基準、そしてそれらが選択された理由も詳述していたものがあった。これらの知見を参考にしながら、具体的な研究方法を検討するのが今後の課題である。

注

1）社会福祉学の研究で馴染みの深いこれらは、それぞれ独自の理論的背景や認識論的前提、目的、研究の焦点や研究対象の捉え方、データ収集・分析の仕方、その他の研究を進める手続きを持ち、論者によって異なる呼び方と種類が示されている。例えば、ソーシャルワークの質的研究論者の Padgett（2017 : 31）は、質的研究の「方法論的アプローチ」（methodological approach）と呼び、よく用いられるものとして、エスノグラフィー、グラウンデット・セオリー、事例研究、ナラティヴ、現象学、アクション志向のリサーチをあげている。大谷（2019 : 29）は「質的研究の手法的系譜」として、上述の他の具体例として、エスノメソドロジー、ライフヒストリー、ライフストーリー、文化心理学、カルチュラル・スタディーズを記している（大谷 2019 : 30）。木下（2020 : 350）は「個別の質的研究法」いう表現で、上述の他に、M-GTA、KJ 法、会話分析を例示している（木下 2020 : 344）。これらについて、本稿は Padgett（2017 : 31）にならい、質的研究の「方法論のアプローチ」あるいは「アプローチ」という言葉で表現していく。

2）以降に記す研究方法である文献選定での基準の設定や文献の整理・分析方法におけるトピックの作成に関して、研究結果で示す本研究の研究対象の諸文献からヒントを得た。

3）表 3 の「各文献で研究対象となっていた論文の概要」に関して、多くの文献において研究対象とされた論文は、いくつかの段階や手続きを踏んで、最終的に研究対象とされた論文が選定されたことが各文献で説明されている。

4）関島・香月・高木・ほか（2005）は、「質的研究の探求の伝統」に該当する研究結果を示した文献として分類した才木・水戸・関（2012 a）が提示した方法論のアプローチの種類と一部同じような「データ解釈法」（関島・香月・高木・ほか 2005 : 64）の種類を示し、質的研究論文での使用を明らかにしていた。しかし関島らの研究では、「コード化／カテゴリー化」という質的データ分析方法がデータ解釈法の 1 つとしてあげられていたため、「質的データ分析法」というトピックに分類した。

参考文献

Akesson, B., Braganza, M. and Root, J.（2018）Is Theory Development Essential for the Social Work Dissertation? *Social Work Education,* 37(2), 209-222.

Barusch, A., Gringeri, C. and Molly, G.（2011）Rigor in Qualitative Social Work Research : A Review of Strategies Used in Published Articles, *Social Work Research,* 35(1), 11-19.

Braganza, M., Akesson, B. and Rothwell, D.（2017）An Empirical Appraisal of Canadian Doctoral Dissertations Using Grounded Theory : Implications for Social Work Research and Teaching, *Journal of Teaching in Social Work,* 37(5), 528-548.

Brun, C.（1997）The Process and Implications of Doing Qualitative Research : An Analysis of 54 Doctoral Dissertations, *Journal of Sociology and Social Welfare,* 24(4), 95-112.

Creswell, J. W. and Poth, C. N.（2018）*Qualitative Inquiry & Research Design : Choosing Among Five Approaches,* 4th Ed., Sage.

Dellgran, P. and Höjer, S.（2001）Mainstream is Contextual : Swedish Social Work Research Dissertations and Theses, *Social Work research,* 25(4), 243-252.

Dellgran, P. and Höjer, S.（2003 a）Topics and Epistemological Positions in Swedish Social Work Research, *Social Work Education,* 22(6), 565-575.

Dellgran, P. and Höjer, S.（2003 b）Towards Autonomy? On Theoretical Knowledge in Swedish Social Work, *European Journal of Social Work,* 6(2), 145-161.

Dellgran, P. and Höjer, S.（2012）The Politics of Social Work Research—Ph.D. Theses in Sweden, *European Journal of Social Work,* 15(4), 581-597.

Denzin, N. K. and Lincoln, Y. S.（2000）Introduction : The Discipline and Practice of Qualitative Research, N. K. Denzin. and Y. S. Lincoln eds. *Handbook of Qualitative Research,* 2nd Ed., Sage Publications, 1-28.（＝2006，平山満義訳「序章　質的研究の学問と実践」岡野一郎・古賀正義編訳，平山満義監訳『質的研究ハンドブック 1 巻－質的研究のパラダイムと眺望』，北大路書房，1-28.）

Flick, U.（2007）*Designing Qualitative Research,* Sage.（＝2016，鈴木聡志訳『質的研究のデザイン』新曜社.）

Flick, U.（2007）*Managing Quality in Qualitative Research,* Sage.（＝2017，上淵寿訳『質的研究の「質」管理』新曜社.）

福島鏡・青木裕見・木下康仁・ほか（2018）「質的研究論文の査読の現状－インタビュー調査の結果から」『看護研究』51(1), 10-11.

Gringeri, C., Barusch, A. and Cambron, C.（2013 a）Epistemology in Qualitative Social Work Research : A Review of Published Articles, 2008-2010, *Social Work Research,* 37(1), 55-63.

Gringeri, C., Barusch, A. and Cambron, C.（2013 b）Examining Foundations of Qualitative Research : A Review of Social Work Dissertations, 2008-2010, *Journal of Social Work Education,* 49(4), 760-773.

狩谷尚志（2020）「日本の生活保護制度における『自立』言説の再検討――1940～1950 年代の「社会保障制度審議会」を構成したアクターの言説を中心とする――」『社会福祉学』61(3)，14-27.

萱間真美・グレッグ美鈴（2018）「質的研究論文のための査読セミナーの背景と査読ガイドラインの提示」『看護研究』51(1), 4-9.

木戸功（2011）「家族社会学と質的研究－質的研究の再興は家族社会学に何をもたらしたのか？－」『家族社会学研究』23(2), 150-160.

木下康仁（2020）『定本　M-GTA－実践の理論化をめざす質的研究方法論』医学書院.

Maynard, B. R., Vaughn, M. G. and Sarteschi, C. M.（2014）The Empirical Status of Social Work Dissertation Research : Characteristics, Trends and Implications for the Field, *The British Journal of Social Work,* 44(2), 267-289.

文部科学省（2013）「学位規則の改正について（要綱）」（https : //www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigakuin/detail/1331807.htm. 2021. 11. 26.）

中村恵子・石崎トモイ・伊豆麻子・ほか（2009）「養護教諭による質的研究における『研究の質』の分析」『新潟青陵学会誌』1(1)，31-39.

大谷尚（2019）『質的研究の考え方－研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会.

Padgett, D. K.（2017）*Qualitative Methods in Social Work Research,* 3rd Ed., Sage.

Rothwell, D. W., Lach, L. and Blumenthal, A. et al.（2015）Patterns and Trends of Canadian Social Work Doctoral Dissertations, *Journal of Teaching in Social Work,* 35, 46-64.

戈木クレイグヒル滋子・水戸由恵・関美佐（2012 a）「日本の医療分野における質的研究論文の検討（第 1 報）－論文数の推移と研究法の混同」『看護研究』45(5), 481-489.

戈木クレイグヒル滋子・水戸由恵・関美佐（2012 b）「日本の医療分野における質的研究論文の検討（第

2 報）－研究法の選択とデータ収集」『看護研究』45（6）, 578-586.
戈木クレイグヒル滋子・水戸由恵・関美佐（2012 c）「日本の医療分野における質的研究論文の検討（第3 報）－データ分析」『看護研究』45（7）, 694-703.
関島香代子・香月富士日・高木廣文・ほか（2005）「医学中央雑誌にみる看護研究における質的研究の動向」『新潟大学医学部保健学科紀要』8（1）, 63-68.
Shek, D. T. L., Lee, J, H. and Tam, S. Y.（2007）Analyses of Postgraduate Social Work Dissertations in Taiwan : Implications for Social Work Research and Education, *International Social Work,* 50（6）, 821-838.
志村健一（2012）「質的研究の動向と課題」『社会福祉学』53（3）, 82-86.
Staller, K. M.（2012）Epistemological Boot Camp : The Politics of Science and What Every Qualitative Researcher Needs to Know to Survive in the Academy, *Qualitative Social Work,* 12（4）, 395-413.
田中謙（2021）「東京都旧保谷市における公立通園事業の展開過程と地方政治――行政組織と民間組織の組織間連携における戦略的協働に焦点を当てて――」『社会福祉学』61（4）, 14-26.

Using Qualitative Research to Identify Trends in Social Work and Social Services Research

Miyoko Yasuda*

ABSTRACT

In this study, a review of literature was conducted to obtain knowledge that can be utilized in the author's planning and implementation of a future study. Such study aims to clarify the characteristics and trends of qualitative research in the fields of social work and social services in Japan. The author conducted a review of previous research in Japan and abroad that clarified the characteristics and trends of qualitative research. The author also studied relevant Japanese literature regardless of their academic disciplines and fields. Foreign literature reviews were limited to social work. The author then reported the results of the literature review which revealed that nine out of the 20 articles studied addressed topics related to "the tradition of inquiry in qualitative research," including the research paradigm, theory, and the methodological approach of qualitative research. Furthermore, the author discussed what the literature provides in order to inform, plan, and implement future research on the trends and characteristics of qualitative research articles and dissertations in social work and social services in Japan.

Key words : Social Work and Social Services, Qualitative Research, Characteristics and Trends

* Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University